近代ドイツの文筆業

—ドイツ帝国における文筆家の職業団体を中心に—

学位論文内容の要旨

本論文は、3部9章から構成されている。

第1部(第1～3章)では、19世紀後半ドイツの文筆家の職業団体の変遷を、通史的にたどって、帝国成立期ドイツの全般的な社会変動との関係を描き出し、文筆家の社会的な状況の変化を分析している。

第1章は、文筆家という職業概念を明確に定義した上で、文筆家を含む知的職業の従事者、またその職業団体との関連、知的専門職の国制化などを通観している。第2章では、出版業が近代的な商業的産業として成立して、いわゆる文学産業という業界が活況を呈していく状況を、法律の整備、出版技術の革新、都市人口の激増、書店数の増加、教育環境の変化との関係から論じている。本論文の大きな中核をなす第3章は、19世紀後半から20世紀の初頭にかけて出現した、ドイツの文筆家の職業団体の活動状況の記述と分析にあてられている。ドイツの文筆家団体史上初めて、文筆家の収入源の確保を第一の目標として掲げ、美学的な問題には関与しないという活動規約が出現した「ライプツィヒ文士協会」(1842年に結成)を、近代的な文筆家団体の出発点に定めて、この協会の規約の分析を中心として、後の近代的な文筆家諸団体の概念的な方向性を分析している。これに続いて、当時の代表的な団体であった「全ドイツ文筆家連盟」(1878)、「ドイツ文筆家協会」(1885)、「ドイツ文筆家連盟」(1887)、「ドイツ文筆家保護協会」(1887)、「ドイツ文筆家組合」(1891)の5団体の活動状況が詳細に分析される。団体規約、団体の出版物、史料に基づく団体加盟者の個人調査などを分析の基礎資料として活用しながら、従来の諸研究ではまったく示されることのなかった当時の文筆家団体の活動通史が描き出される。そして、「全ドイツ文筆家連盟」がすでに、著作権法の整備、法的な権利の保護、年金制度の確立などを規約に盛り込み、職業集団としての文筆家の社会的な地位の保証を理念として掲げていた事が明らかにされる。さらにこれに続く諸団体が、第2部で詳しく論じられる諸人物たちを中心とした軋轢の中で変化を遂げながらも、ジャーナリズムとの関連、運用可能な年金、基金制度の整備などをめぐって、離散と再結成をくり返す様が、史料に基づいて詳細に論じられる。団体の活動に関する考察は、1934年、ナチスが台頭して、民間の職業団体が消滅するまで行なわれ、その活動が、叙情詩人の生産物に関する価格協定カルテルの結成(「叙情詩作者のカルテル」1902)、労働組合への組織転換(「ドイツ文筆家保護連盟」1920)など、

労働者としての自己規定を鮮明にした組織に変遷していき、19世紀後半からの文筆家団体が、文筆家という職業を、経済的な社会活動として位置づけるための基盤整備に尽力していた事が明らかにされる。第3章第4節では、同じ時代の女性の文筆家団体の歴史が別個に調査されている。簡潔な記述ではあるが、こうした通史の調査と考察もまた、研究史上初のものである。

第2部（第4～7章）では、この諸団体の同時代に活躍した4人の個人史が取り扱われて、各々の社会活動の歴史的な定位が行なわれる。

第4章では、ドイツ史上初めて出現した文学出版人ヴィルヘルム・フリードリヒの個人史が追跡される。「全ドイツ文筆家連盟」からの、ドイツ初の機関誌を発刊したフリードリヒが、商業化の激化していた当時の出版業界とは一線を画し、また帝国成立に伴って盛んになっていた愛国主義的な風潮とも距離をおいて、精力的に世界各国、とりわけフランス自然主義文学を紹介し、国内のあらゆる文筆家の著作の出版に奔走した経緯が詳細に記述されている。従来の研究では見逃されていた、当時の文学活動に関する彼の多大な寄与が明らかにされている。第5章で当時の文筆家の経済状況に関する分析が行なわれた上で、第6章は、文学史上は軽視されがちだが、実は当時の文筆家のデータを収録して相互交流の場を開いた『全ドイツ文学カレンダー』の創刊者であり、また「全ドイツ文筆家連盟」の活動に大きく関わったハルト兄弟の個人史の記述にあてられている。作家としては評価の低いハルト兄弟が、文筆家の経済的な地位の向上に多大な尽力を惜しまなかった様が明らかにされている。第7章は、わずかにドイツ初の包括的な文学全集『ドイツ国民文学』の編集主幹としてその名を知られるにとどまっているヨーゼフ・キュルシュナーの詳細な個人史の記述である。フリードリヒやハルトとは異なり、商業活動に徹した出版業者が、「全ドイツ文筆家連盟」、「ドイツ文筆家協会」の活動に重大な役割を果たしていた点、また、文筆家という職業概念に関する論争に独自の視点から関わりつつも、自らは出版業者として成功していく経緯が、研究史上初めて、まとまったかたちで記述され、考察の対象とされている。

第3部では、従来 of 文学研究、社会史研究双方の盲点であった、しかしながら当時の文筆家が主たる生計の手段としていたジャーナリズム活動が取り扱われている。

第8章では、技術革新に伴う情報産業の発展が、文芸作家とジャーナリストとの乖離を誘発して、ジャーナリストが情報産業の下請け業と認識されて文学業界から差別化されていく歴史的経緯が記述されている。第9章では、こうして身分的な差異化を遂げたジャーナリストが、文筆家団体から独立して新たな職業団体を形成し、さらにジャーナリストを養成する高等教育機関を設立するに至ることが明らかにされた。

最後に「結論」として本研究の論述が概括され、近代ドイツの文筆業がさまざまな連盟組織を誕生させながら職業身分として自己意識を確立していく過程の問題点とその歴史的な意義が指摘されている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 関 孝 敏

副 査 助 教 授 石 原 次 郎

学 位 論 文 題 名

近代ドイツの文筆業

—ドイツ帝国における文筆家の職業団体を中心に—

本論文は、19世紀末葉から20世紀初頭のドイツ、文学史の区分では自然主義の時代と言われる時期の作家の職業的な意識とその職業団体としての実現に関する社会史的研究である。ここ数十年、作家とその作品の解釈とは別に、作家の置かれている社会的な環境をテーマとする、いわゆる文学の社会史という研究分野は、ドイツ文学の分野でも安定した地位を獲得するに至っているが、本研究は、この社会史的なアプローチの中でも、従来あまり顧みられることがなかった職業としての作家というテーマに着目した、基盤的であると同時に非常に斬新な研究である。経済的に自立できる職業としての文学活動は、従来ある程度自明のものとして見られてきたが、本研究は、こうした職業としての作家概念が、19世紀末に作家集団の様々な試行錯誤の末に獲得されたものであることを実証的な手法で綿密に解明している。主要な分析対象となっている団体組織「ライプツィヒ文士協会」、「全ドイツ文筆家連盟」、「ドイツ文筆家協会」、「ドイツ文筆家連盟」、「ドイツ文筆家保護協会」、「ドイツ文筆家組合」及びこれらの団体の組織化の過程で指導的な役割を果たしたヴィルヘルム・フリードリヒ、ハルト兄弟、ヨーゼフ・キュルシュナー等の個人史研究は、わが国の関連学会では殆ど行われておらず、本論文はこの分野での先駆的な研究となっている。また、分析資料の大部分は、著者がミュンヘン大学留学中に現地で収集した一次文献であり、本論分が首尾一貫した研究計画に基づいた成果であることを示している。

本論文は、文学研究と社会史研究のふたつの分野を横断する学際的な研究であり、統計データの分析に関してはまだ洗練の必要が認められるものの、両分野に対する貢献度は極めて高いものと判断できる。とりわけ本論文は、近年活況を呈している文学の社会史的な諸研究の中でも、次の点に著しい革新性と貢献が認められる。

- ・ 作家の個人史研究ではなく、作家集団の歴史的な動態を記述した点。
- ・ 従来大きな関心が寄せられなかった、作家の職業的な自立の模索の過程を、文筆家団体の歴史という斬新な視点から捉えた点。職業としての作家という概念、あるいはア

イデンティティーが、まさにこの時期に、職業団体という具体的なかたちを伴って発生したことを、研究史上初めて、極めて明瞭に提示しえた。

- この記述と分析から、文筆家の職業的、とりわけ経済的な境位が、文学の史的な転回に重大な影響を与えることを明確にした点。
- 近代的な文学産業の成立過程を、当該研究分野（ドイツ文学）で初めて、包括的に記述した点。
- さらに、女性文筆家の職業団体、ジャーナリストの職業団体に関してやはり初めて通史を記述した点。

これらの成果は、文学の歴史的な研究の方法、歴史観の双方に、大幅な見直しを迫るものである。

以上、審査委員会は本論文の革新的な成果を大きく評価し、その学術的な貢献度は極めて高いものと判断した点で、委員全員が一致し、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい成果であるとの結論に達した。